

令和 2 年 6 月 24 日現在

機関番号：14701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K17445

研究課題名(和文)インクルーシブ教育システム構築のための「自立活動」における音楽カリキュラム開発

研究課題名(英文)Music Curriculum development for constructing an Inclusive Education System in "Self-reliance Activities (Jiritsu Katsudou)"

研究代表者

上野 智子 (UENO, TOMOKO)

和歌山大学・教育学部・准教授

研究者番号：80583939

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、特別支援学級の児童生徒が自分自身の音楽性や感性を使いながら主体的に学習に参加したり、音楽を通して他者と関わったりするための基盤となる「自立活動」の音楽カリキュラムの開発研究である。中学校特別支援学級における音楽療法的視点を取り入れた「自立活動」(「音楽の時間」)の実践を通して、音楽療法、音楽科教育、特別支援教育の観点で分析による「音楽の時間」の構造と機能の解明、質問紙調査によって音楽を用いた「自立活動」の実態の一端を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、特別支援学級における音楽を用いた「自立活動」において、音楽療法的な視点を用いることや即興表現を活用することで、児童生徒の心理的安定や自己表現の促進、他者との関係性の構築等に有効であることを明らかにした。また、こうした考え方を基に児童生徒の生活文化にある題材を用いた表現活動を行う事は、特別支援学級外の児童生徒や教員、地域の人々との関りを促すことになり、インクルーシブ教育としての可能性を有していると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study is part of music curriculum development research for "Self-reliance Activities" (Jiritsu Katsudou) for junior high school students enrolled in special education classes. It aims to provide the foundation for positive participation in learning activities using self-musicality and sensibility, and to foster consciousness of others, communication with them, and development of relationships through music activities. The study used a questionnaire survey to examine the structure and function of the "Our Music Time" part of Jiritsu Katsudou from the perspectives of music education and music therapy, and analyzed the efficacy of using music in special education.

研究分野：音楽科教育

キーワード：音楽教育 特別支援教育 音楽科教育 自立活動 音楽療法 インクルーシブ教育 他職種との連携

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

2014年2月、「障害者の権利に関する条約」の効力が我が国においても発生し、インクルーシブ教育システムの構築が目指されるようになった。この考え方を具現化したものとして「交流及び共同学習」が挙げられ、国立特別支援教育総合研究所の調査(2008)によれば、音楽科は、実施率が最も高く、知的障害に絞れば約9割の学校で実施されている教科である。しかしながら「交流及び共同学習」に関する先行研究をみると、障害のある児童生徒の主体的な参加を促すための環境整備や支援の在り方に関するものが中心であり(篠原、杉谷(2007)松田(2009)尾崎(2014)等)、支援学級の児童生徒が潜在的にもつ音楽性や可能性を引き出すような指導・支援の検討が看過されてきたとも言えよう。つまり、支援学級の児童生徒が支援の対象者としてのみ捉えられるのではなく、彼らが自身のもつ音楽性や豊かな感性を開花させ、学習活動に主体的に関わるような基盤づくりのための理論的実践的研究が必要不可欠と考えた。その際、障害による学習上又は生活上の困難の改善・克服を目的とした特別の指導領域であり、音楽科や音楽活動あるいは音楽療法と関連づけた先行事例(川崎(2015)渡邊(2015)尾崎(2015)等)を見ることができ、「自立活動」に着目した。

応募者は2013年から中学校特別支援学級の「自立活動」の時間に音楽療法の手法を用いた音楽活動「音楽の時間」(以下、「音楽の時間」)を行っている。特別支援学級の児童生徒は、「交流及び共同学習」をはじめインクルーシブ教育の最前線にいる存在である。彼らは、年齢が上がるとともに友人たちと発達面での差が開き、関係性を築くことが難しくなったり、自らの障害を自認することができず生きにくさを感じたりすることが多くなる。特別支援学級の児童生徒たちが学校生活の中で居場所を感じながら真の意味で共生できるためには、まず彼ら自身が緊張をほぐし心理的安定を保てるようになること、自己を受容し伸び伸びと自己表現できるようになること、他者理解を深め関係性を築いていくことなどが必要であった。「音楽の時間」は、特別支援学級の生徒にとって上述のような安心できる場になっているだけでなく、彼らのユニークな即興表現など豊かな音楽性を発見でき、教員にとっては生徒理解の場となっていた。さらには、「生活単元学習」と結びつけた創作活動を行い、「音楽の時間」外で発表するなど、「自立活動」の枠を越えた様々な機能や可能性があることが明らかになってきた(上野、菅、山崎(2015))。

また、「音楽の時間」は、近年の音楽療法学界において注目されているコミュニティ音楽療法に通じるものがあると考えた。コミュニティ音楽療法は、音楽療法室という閉じられた空間内での営みから外の世界に積極的に参入していくという、より開かれた形で音楽療法の場を広げようとするものである。そしてコミュニティのもつ音楽文化にただ参加するのではなく、クライアントのもつ音楽性が存分に発揮されること、相互に影響し合い創造的に働きかけ合える関係を築いていくことを重視しており、クライアントが音楽をとおしてコミュニティの中の価値ある1人として共生していくことを目指している。このようなコミュニティ音楽療法の考え方はインクルーシブ教育とも通じるものがあり、特別支援学級における音楽療法を取り入れた「自立活動」は、特別支援学級の児童生徒たちにとって安心して自己表現や他者との交流ができる場になるだけでなく、自身の創造性や音楽性を発見・育成し、特別支援学級外の世界と繋がるきっかけの場になると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、特別支援学級の児童生徒が支援の対象者としてのみ捉えられるのではなく、自身のもつ音楽性や豊かな感性を開花させ主体的に学習活動に関わり、音楽を通して特別支援学級外の人々や事物と関わるための基盤となる「自立活動」の音楽カリキュラムを開発・検証することを目的とした。その際、音楽療法の理論や手法を取り入れることで、自己表現や他者との交流が安心してできる場を作るとともに、共同体の構成員一人ひとりが価値ある存在であることを前提に、音楽を通して相互に影響し合い創造的に働きかけ合うコミュニティ音楽療法の考え方を援用する。そして、開発したカリキュラムとそれに基づいた音楽活動を特別支援学級で実践・検証することで、インクルーシブ教育システムを構築するための方途を提示することを目指した。

3. 研究の方法

本研究では、「自立活動」における音楽カリキュラムの開発・検証として、中学校特別支援学級における音楽療法的視点を取り入れた「自立活動」(「音楽の時間」)の実践、音楽療法、音楽科教育、特別支援教育の観点からの分析による「音楽の時間」の構造と機能の解明、質問紙調査による実態把握を行った。

「音楽の時間」の実践については、各実践校において、年5回程度、1回につき60分~120分程度の音楽活動を行った。なお、毎時間ビデオ2台による録画を行うとともに、学級担任とは事前の情報共有や意見交換を行うとともに、活動後の振り返りや助言等をもらった。また、参加した生徒や担任以外の教員、大学生についても活動終了後に感想を書いてもらい、次の活動を考案する際の参考および検討材料とした。

「音楽の時間」の構造と機能の解明については、の実践を録画したデータを分析し、年度ごとに視点を変えて実践を分析した(詳細は4.研究成果(2)にて後述)。

質問紙調査による実態把握については、和歌山県内の特別支援学校教員を対象に、音楽科および音楽による「自立活動」に関する質問紙調査を行った(詳細は4.研究成果(3)にて後述)。

4. 研究成果

(1) 中学校特別支援学級における音楽療法を取り入れた「自立活動」(「音楽の時間」)の実践
2013年より行っている中学校特別支援学級での「音楽の時間」の実践を継続し、これまでの取り組みを踏襲しながら、音楽療法的視点を取り入れた即興的な音楽活動を考案・実施し、生徒たちの実態に応じてICTを活用した即興表現や造形・身体表現等を融合させた活動等を行った。また、2017年度には、実施校が1校増えたことで、隣接する小学校特別支援学級の生徒も参加する機会を得ることとなり、小中接続の観点も含めた活動を展開した。さらに、2018年度からは、生徒たちの地域文化に関わる題材を用い、生徒たちの感性を活かすような表現活動を取り入れた音楽劇にも取り組み、文化祭で発表することも「音楽の時間」の活動として行った。各年度の「音楽の時間」の取り組みの成果は、『和歌山大学教育学部連携事業成果報告書』において公表した。

(2) 音楽療法、音楽科教育、特別支援教育の観点からの分析による「音楽の時間」の構造と機能の解明

「音楽の時間」の取り組みは全てビデオ録画で記録するとともに、また参加者には活動終了後に感想を書いてもらっている。したがって、これらの映像および感想の分析をもとに、以下の4つの観点から「音楽の時間」の構造と機能について解明を試みた。

1) 「音楽の時間」における即興音楽活動の機能について

2016年度には、これまでの「音楽の時間」において生徒たちが特に好み、没入した2つの即興音楽活動を取り上げ、映像記録の分析を通して自己肯定感や安心感、自己表現能力を引き出していく即興音楽活動の構造とその特性に着目した。これら2つの即興音楽活動は活動の始まりと終わりが視覚的に明示されていること、安心して即興的な音楽表現を行うだけでなく、より積極的に自身の奏でる音への探求や音を通じた他者との交流を促す音楽的支えがあること、ペアになり片方の即興表現を模倣することで、他者との関わりを促す仕掛けになるとともに、役割を順次入れ替えることで関係が固定化されないため、表現自体をアップデートするようになること。さらにはこうした過程において「殻」を破ったユニークな表現生まれ、そこで起きた「笑い」が参加者同士を結び付け協働的な音楽空間を創り出すこと、操作がしやすく音色・音量等に配慮した楽器の選定がされるとともに、空間を自由に動いて表現することで、音による出会いと交流が促されること、等が明らかになった。本内容は、“A Musical Therapeutic Approach for Children with Disabilities in Special Education Classes in an Ordinary Junior High School”(2016)として投稿し、掲載された。

2) 「音楽の時間」における自閉症児の自己表現と他者との関係性の形成について

2017年度には、「音楽の時間」に参加している2名の自閉症児に焦点をあて、音楽療法的活動において、自己表現、他者との関係性の形成、という2つの課題を設定し、映像記録や担任のコメントをもとに、第1に生徒たちの表現活動の様子の分析、第2にそれらを引き出す音楽療法的活動の構造と特性の解明を目的とした。その結果、音楽療法的な活動は半定形化(ゆるやかなルールと即興表現による)した楽曲構造や活動によって成立しており、それが自閉症児たちの上記2つの課題に対し有効性を明らかにした。また知的障害児学級と自閉症児学級での合同活動は、多様な価値観の共有にも有効であり、インクルーシブ教育の実践にもつながることを指摘した。本内容は、“Musical Therapeutic Activities for Students of a Junior High School Special Needs Education Class Including Children with Autism Spectrum Disorders”(2017)として投稿し、掲載された。

3) 「音楽の時間」における担任と大学教員との協働について

2018年度には、「音楽の時間における」大学教員と中学校特別支援学級の担任教員との協働について、この活動における特定の生徒(生徒A)の変容過程と担任教員と大学教員のかかわり方を明らかにした上で、大学と地域の学校が連携して特別支援教育の実践研究をすすめることの意義と課題の一端を明らかにすることを目的とした。取り上げた実践では、音楽療法的活動によって、生徒Aの心身の解放や自己表現の試みが生まれ、活動の有効性が確認できたこと、その背景には、担任教員の特別支援教育の実践家としての専門性と大学教員が持ち込む音楽療法的視点という新しい知が掛け合わされ、総合的な知見が生み出されていたことを明らかにした。この総合的な知見は、専門性の異なる二者の連携の中でアセスメント・実践・反省のサイクルの中で更新されており、ここに複数機関の連携していくことの意義があることを指摘した。本内容は、“Utilizing University, and Special Needs Education Resources and Musical Therapeutic Activities and Self-reliance Activities at Public School Elementary / Intermediate Special Needs Classes, and a University-related and Other Special Needs Schools”(2018)として投稿し、掲載された。

4) 音楽カリキュラムとしての「音楽の時間」における音楽活動の位置づけ

2019年度には、これまでの「音楽の時間」での音楽活動、および2018年度から始めた、生徒たちの地域文化に関わる題材を用い、生徒たちの感性を活かすような表現活動を取り入れた音楽劇の取り組みについて、これらが「自立活動」の音楽カリキュラム内でのどのように位置づけるのかについて検討を行った。その結果、生徒たちの心理的安定や、他者との関係性の構築、また自己および他者理解としての場になる音楽活動と、地域文化という共通項で特別支援学級外の生徒や地域の人々と関わり・繋がる音楽活動があること、その際に特別支援学級の生徒たちの感じ

方捉え方を保障するような即興表現活動が鍵になることを指摘した。本内容については、日本音楽教育学会第 50 回大会（2019）において、一部を紹介する形で発表した。

（3）質問紙調査による実態把握

2019 年度には、県内の特別支援学校教員を対象に音楽科および音楽を用いた「自立活動」に関する実態調査を行った。音楽を用いた「自立活動」特徴等を明らかにし、この調査の一部は修士論文としてまとめられたが、引き続き分析を進める必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Tomoko UENO, Michiko KAN, Yukari YAMAZAKI	4. 巻 63
2. 論文標題 Utilizing University, and Special Needs Education Resources and Musical Therapeutic Activities and Self-reliance Activities at Public School Elementary / Intermediate Special Needs Classes, and a University-related and Other Special Needs Schools	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 HNUE Journal of Science	6. 最初と最後の頁 141-146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tomoko Ueno, Michiko Kan, Yukari Yamazaki	4. 巻 62
2. 論文標題 Musical Therapeutic Activities for Students of a Junior High School Special Needs Education Class Including Children with Autism Spectrum Disorders	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Hanoi National University of Education Journal of Science	6. 最初と最後の頁 3-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tomoko Ueno Michiko Kan Yukari Yamazaki	4. 巻 6
2. 論文標題 A Musical Therapeutic Approach for Children with Disabilities in Special Education Classes in an ordinary Junior High School	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Journal of Educational Science - Ministry of Education and Training VIETNAM	6. 最初と最後の頁 145-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Tomoko Ueno, Michiko Kan, Yukari Yamazaki
2. 発表標題 Utilizing University, and Special Needs Education Resources and Musical Therapeutic Activities and Self-reliance Activities at Public School Elementary / Intermediate Special Needs Classes, and a University-related and Other Special Needs Schools
3. 学会等名 International Conference Developing the Support Service System on Inclusive Education for Persons with Disabilities (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tomoko Ueno, Michiko Kan, Yukari Yamazaki
2. 発表標題 Musical Therapeutic Activities for Students of a Junior High School Special Needs Education Class Including Children with Autism Spectrum Disorders
3. 学会等名 International Scientific Symposium Intervention, Therapy and Inclusive Education for Children with Autism Spectrum Disorder (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Tomoko Ueno Michiko Kan Yukari Yamazaki
2. 発表標題 A Musical Therapeutic Approach for Children with Disabilities in Special Education Classes in an ordinary Junior High School
3. 学会等名 Human Resource Development for Inclusive Education in Vietnam Scientific Conference 6.17.2016, UNICEF, Vietnam Ministry of Education and Training, and Hanoi National University of Education (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 【企画者】渡邊真美 【話題提供者】上野智子 菅 道子、 川崎亜希子
2. 発表標題 ラウンドテーブル「学校教育の中の音楽療法～学校現場での音楽療法の専門性とは～」
3. 学会等名 日本音楽療法学会 第15回 近畿学術大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 沼田里衣, 上野智子, 菅道子, 山崎由可里
2. 発表標題 『動いている音楽』: 図形楽譜を用いたインクルーシブな活動の可能性 - 学校の内外をつなぐコミュニティ音楽活動の共同研究から -
3. 学会等名 日本音楽教育学会第50回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----